

実用美を兼ね備えた金網製品の 海外向け新商品開発・販路開拓

金網つじ

金網職人／「高台寺金網つじ」オーナー

辻 徹さん



辻 徹さん

平成23年度 採択事業

毎日使われるものを

金網つじは、手作りでの京金網の製造販売を手掛ける1985年設立の職人工房です。今回お話を伺ったのは、代表でもあり、金網職人の辻賢一さんのもとで金網づくりを学び、後継者でもある辻徹さん。「伝統工芸とは決して特別品ではない。2世代、3世代と毎日使われるためのものづくりをしていきたい。」と、日々精力的に営業、販促活動にも取り組んでいらっしゃいます。海外への販路開拓もその延長線にすぎず、相手のライフスタイルを知り、常に使っていたいと思われるものづくりを通して、使って下さる方との新たな出会いを大切に…これまで国内で続けてきた製造販売の手法とやら変わることはありません。根底にあるのは、手作りしか出せない確かな技術力と造形美への自信。そういったものづくりへ共感して下さる方、確かな技術から作りだすものを生活に取り入れて下さる方へ発信し、これからも形ではなく技術を伝えていきたい、と考えていらっしゃいます。

定番商品からの展開

金網つじの定番商品では、茶こしやとうふすくい（豆腐すくい）が身近に感じられます。銅線を一本一本放射状に手作業で編みながら作り上げる、職人技が詰まった逸品で、日本の食文化である日本茶や湯豆腐に欠かせない生活道具です。この京金網の技術を、2009年フランス・パリで開催された、生活雑貨国際見本市「メゾン・エ・オブジェ」（京都商工会議所 KYOTO PREMIUM 事業）に出展したところ、海外のバイヤーから高い評価を頂き、ヨーロッパ諸国での手ごたえを感じたと言います。



金網つじの定番商品「とうふすくい」「菊丸」
（左：ステンレス、右：銅）

しかし、とうふすくいや茶こしは、日本の食文化から生まれた道具。もっと海外のライフスタイルに合った京

伝統製品の活用



茶こし（左：ステンレス、右：銅）

金網を提案できないか、と、徹さんはご自身の足で海外諸国を巡り、ご自身の体でその国の生活や文化を感じ、交流を通してニーズを探ると言います。例えば、ヨーロッパの茶文化と言えば紅茶。海外のバイヤーからのリクエストは、オレンジペコ専用のティーストレナーを京金網で、というものでした。徹さんは、このリクエストを持ち帰り、父でもある賢一さんに伝えます。賢一さんは、日本茶と紅茶の茶葉の違いを確認し、これまでの茶こしの技術をそのままに、新しい設計図から作りあげました。徹さんは若い頃、京金網づくり一筋の父の賢一さんの姿を見ながら、「どうしてこんなことをするのだろう」と思っていたそうです。しかし、社会人としての経験を積み、人生経験の幅も広がるにつれ、ものに対する価値観が変わっていったと言います。実用品として常に触れていたと思うものこそ価値があり、そこに手作りしか表現できない実用美が備わるものづくり…金網つじが



イタリア・ミラノでの出展の様子

ずっと続けてきたものづくりの考え方を、徹さんはしっかり賢一さんから継承し、現在進行形で実践しているのです。

NEW PRODUCTとしての伝統工芸

2007年、高台寺に直営店「高台寺 金網つじ」をオープンしました。そのオーナーでもある徹さん。直営店は、実際に金網つじの道具に触れることができ、若者から外国からの観光客まで、丁寧な接客を心がけていると言います。「伝統工芸は、これまで触れることがなかった方にとってはNEW PRODUCTなんです」と徹さん。伝統工芸とは使われるための道具を、使われる方のニーズにこたえながら作り続ける行為そのものであり、直営店で初めて手に取ってくださった方は、そこから新しい出会いとなり、ずっと使い続けるためのお付き合いが始まるとのこと。喜んで使って下さるお客様に出会える喜びは、国内でも海外でも同じです。

徹さんは、広く伝統工芸の良さを発信し、技術を後世に伝えていきたいと、同じ想いを持つ伝統工芸と言われる世界の後継者たちとクリエイティブユニット「GO ON」を結成しました。時代とともにある伝統工芸を次世代に繋げるために、真を貫き、決して歩みを止めない覚悟が、そこにはありました。



直営店「高台寺 金網つじ」

事業概要

金網つじ

<http://www.kanaamitsuji.com/>

代表：辻 賢一

業種：金網製品の製造・販売

創業：昭和60（1985）年 設立：昭和60（1985）年

住所：〒603-8425 京都市北区紫竹下緑町61-4

TEL：075-491-4663 FAX：075-491-8663